「『へ』のカンヅメ!?」

目の前に突き出された缶詰に、ぼくは一瞬驚き、そして思い出した。

「まだ開けてなかったのか」

うかがうようにたずねると、康太は大きくうなずいた。

「うん。だって、お兄ちゃん言ったじゃないか。このカンヅメは困った時に開けるんだぞって」

康太は、つぶらなひとみを輝かせて言う。

「だから、ずっと取っておいた」

「今こそそのときだ」と言わんばかりだ。

ぼくがこのカンヅメを買ってきたのは、ちょうど一年前のことだった。小学校三年生のとき。十一月の連休に、ぼくは初めて一人旅をした。その年の夏に鹿児島に転校していった友達の佐藤くんの家に、一人で新幹線に乗って行ったのだ。と言っても、新八代の駅まではお父さんに送ってもらい、鹿児島中央の駅までは、佐藤くんとその家族が迎えに来てくれたから、一人でいたのは、九州新幹線の中だけだ。しかもいちばん速い新幹線に乗ったから、一時間もかからなかった。途中の出水と川内は通過し、次が終点鹿児島中央だ。

それでも一人っきりでどこかへ行くのは初めてで、シートに座っている間中、胃袋が持ち上がっているみたいだった。このまま違う街へ行ってしまったらどうしよう。途中、トンネルばっかりで、どこを走っているかわからなかったのだ。

だから鹿児島中央駅のホームに降りて、待ちうけてくれ